



福崎かずたろう

最初に：25ページあります。適当に分けて読んでね。

さて、今年も文化祭がらみの休日が取れたので、またもや東北へ行く事にした。去年は傷身のエス君に無理をさせたわけだが、今年は12カ月点検直後というすばらしいコンディションでのドライブなのである。

9 / 29 (金) ー出発から酒田市までー

☆ 北陸高速自動車道路

府立F高校で1時間目の授業を終えた私は、速攻で家へと向かった。本日は文化祭前日で、授業はこれで終わりなのだ。途中ローソンで本日分の食料と飴・チョコレートの類を買い込んだ。そして家へ帰って常備してあるウーロン茶の缶2ダースとともに車に積み込む。水・食料は旅行へ行く場合、たいへん重要なのである。

カメラバッグ・布団毛布・旅行カバン・地図なども積み込み、いよいよ出発である。さすがにこれから3000kmも走るかと思うと、普段はしないような運行前点検までしてしまう。全てOKで出発！

しかし、実は忘れ物をしてしまった。ハイキングシューズ（というより軽登山靴に近いが）である。吹田IC（インターチェンジ）から名神高速道路に入ってすぐ気付いたのだ。茨木ICで降りて戻れば、時間にして30分、通行料200円程度の損失で解決できたのだが、無ければ無いでいいや、などと考えてしまったのである。しかしこれで後々泣きを見る事になるのだ。

さて、米原ジャンクションから北陸道に入る。昨年とまったく同じパターンである。しかし去年が夜間だったのに対し、今年は真っ昼間である。景色がよく見える。北陸道は夜間だろうが昼間だろうが実に車が少ない。そして敦賀あたりを除いてはフラットな直線区間ばかりである。よって飛ばそうと思えばいくらでも飛ばせる快適な高速道路なのである。

現に、もの凄いスピードでBMWのコンバーチブル（幌付き車：エスクードと同じ）が追い越していった。しかしこの車は後に、白いブルーバード（だと思う）の覆面パトカーに捕まってしまうのだ。目撃してしまったのだ。かわいそう？

高速道路にも覆面パトカーがいるというのは、けっこうショックであった。よって私もスピードは控えめに走った。少しでもスピードが出ると、後ろに白い車が走っていないか気になってしまう。そして白い車というのは、けっこう走っていたりするので、そのたびに減速してしまうのだった。まあそれでも休憩を含めて1時間あたり80kmのペースで走ってましたから、常時100kmは出ていたことになりますね。

尼御前SA（サービスエリア）で休憩、あんころもちを食う。袋に「生物ですのでお早めに……」とある。おそらく「なまもの」という意味であろうが、ふつう「せいぶつ」と読んでしまう。あるいはアンコの中に微生物がうじゃうじゃしているのだろうか。でもよく考えたら、うじゃうじゃしてるのが当たり前なのかな。

福井・金沢・富山と、日本海側の中都市を順調に通過していく。そして北陸道の大景勝地、親不知の海上道路を通過する頃には、陽は背後に落ちており、空の残照とナトリウムランプが互いに道路を照らしていた。しかし思っていたより海上道路の区間は長かった。この区間は右に左にと、大きなカーブが連続するため、遙か彼方に北陸道自身の橋げたが見えたり、その下に打ち寄せる日本海の波濤が見えたりと、けっこう豪快な展望が車の中に居ながらにして見ることが出来るのだ。

そしてそれが終わると、恐怖の対面通行トンネルの連続である。しかしこれも意識がハッキリしているから余裕。去年の朦朧とした半睡眠状態での通過とは違うのだ。

18時53分、大積PA（パーキングエリア）到着。陽もとっぷりと暮れ、けっこう寒いのである。ここではちょっとした休憩をするだけのつもりであったが、売店の横にプレハブの簡単な食堂があり、なぜかその中に吸い込まれてしまう。ラーメン310円とおにぎり2個160円を注文する。寒さの中でのラーメンは実に有り難い食物である。こういった暖かい汁物を摂取すると、冷えた体の中に一本の熱を持った管、消化器官という物が存在するという事を、改めて意識する事ができる。さらに急いで摂取したりすると、気管に詰まったりして呼吸器官の存在も確認できたりするのだ。まあそんな事はどうでもよろしい。

それから1時間で新潟黒崎IC到着。一般道に入る。日本海に添う国道7号線にのってどんどこ北上を続ける。2時間半ほど走り、鼠が関（ねずがせき）を越えると山形県である。山形県というのは、日本の中でもマイナーという点では1・2を争う県では無かろうか。まず東北なのか北陸なのかよく判らない（東北です）。内陸なのか海があるのか分からない（けっこう有るのだが）。蔵王を除いてメジャーな観光地が無い。これといった県の特産品が無い（サクランボぐらいか）。山形県の大まかな県地図を描いてみい、と言われてもまず誰一人として描けないであろう。うう、かわいそうな山形県！ しかしそれで

も、車を止めて見た星は綺麗でしたよ。えらいえらい。ひさびさに天の川のボォっとした流れを見ることが出来ました。山形県えらい！

海沿いの道路では「高波注意」の標識が。じっさい防波堤から波しぶきが飛んできてるもんなあ。昼間通ったらけっこう眺めが良いことだろう。

9 / 30 (土)

—鳥海山から下北半島まで—

☆ 奥山林道

昨夜は11時50分まで走りつづけ、酒田市の東の外れ、今から走る林道の入り口までやってきて、車を止めたのであります。オリオン座が東の地平線から昇りつつあるのを眺めながら寝ました。しかし寒かった！

9月29日の走行距離

784.7km。

で、本日は目覚めとともにエンジンを入れ、ヒーターで窓の曇りを落とし、冷えた車体と体を暖めて、林道スタートであります。

奥山林道。原生林の中を、鳥海山をとり巻くようにして登る林道である。この林道は林道の中でもかなりハードな部類に入る。道幅

は当然1車線、山岳路線なのでかなり急な勾配もあり、岩石や土の路盤の上には、大小さまざまな落石がところ狭しと散りばまれている。下手に走ればパンクやスリップしてそのまま谷底へという感じなので、低速でじわじわと確実に登っていく。車体は落石や岩盤に乗り上げ 前後左右に揺れる。カメラバックが揺れ、三脚がはねて音を立てる。舌を噛むので 口はつむったままなので息苦しい。当然 土ぼこりが入ってくるので窓を開ける事はおろか、通風口を開けるわけにもいかない。

悲惨だ。しかし、これがまた楽しいのだ！ 後で調べると1時間で17kmしか走れていなかったようだ。ノンストップで17km/h は かなり低速である。

さて、このようなひどい道路で（楽しみつつも）、じわりじわりと高度を上げていくと、ついには鳥海山の裏登山口である大清水（おしず）についた。ここは鳥海山の東山麓にあたり、高度にして800mほどある。「次郎滝の上に鳥海山を望む」大展望で、特に朝の斜光で輝く鳥海山はボリューム感がある。

ここは車50台ほどが留められる大広場で、夏などはキャンピングカーやテントで賑わうのかも知れない。が、9月30日土曜日の朝6時37分現在は、大阪からやってきたエス



クード1台である。どーんと横たわる鳥海山を前方に見つつ、前日の夜に買ったおにぎり3個で朝食とする。空気がうまい。

さて、ドライブとしての鳥海山は、本来であれば西側（つまり日本海側）にある鳥海ブルーライン（有料道路）を通るのが一般的であろう。ガイドブックによれば「登るほどに日本海がひらけ、飛島もよく見える」展望ルートなのである。けっこう魅力的な感じではあるが、今回はパスした。なぜか？有料道路（1600円）だから、ではない（以前ならそうであったかも知れないが）。今回の東北ドライブは、「林道を走ろうではないか！」という確たるテーマが存在しているのだ。エスクードは四輪駆動車である。このせつかくの性能を大阪の能勢や茨木のごくごく短い林道を往復させるだけでは、余りにもったいないではないか。

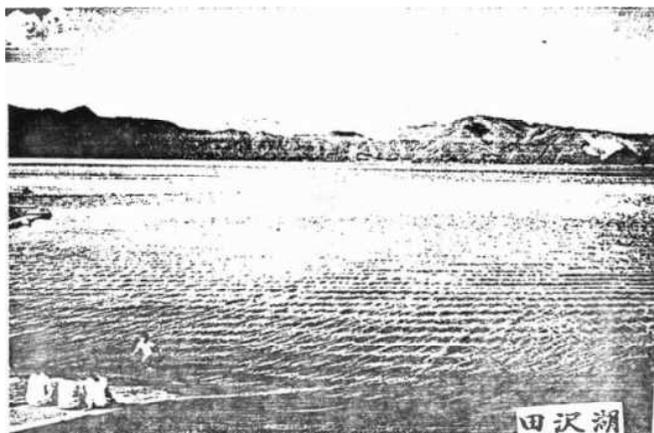
さて、ということで、どマイナーな林道ルートを通ってきたことによって、私は何か鳥海ブルーラインに対して、と言うか同ラインを通っただけで満足する一般ドライバーに対して、何らかの優越感を持ってしまった。チンケな話である。鳥海山頂上を歩いて目指す登山家の方々から見れば、「フン、車で、しかも登山口までやって来ただけで、何言ってやんでえ。」などと軽くあしらわれてしまうであろう。しかし、そういった人々だって、考えようによってはチンケである。駅までは列車で来て、さらには登山口まではバスでやって来ているのだ。「おれは鳥海山に登るため東京から歩いてきたのさ。」という放浪おじさんには かなわないであろう。しかしその放浪おじさんだって「わしは鳥海山に登るためインドから歩いてきたのじゃ。」という謎のインド僧には かなわないであろう……？

つまり、人の満足度というものは、その人固有のレベルのものであって、他人に対してとやかく言うものではないのではないかと私は、開き直って思ったりするわけだな。

このあと鳥海林道を経て祓川P（鳥海山北登山口）へいき、湿原を見る。その後は鶯川林道を通り、国道へ復帰。田沢湖を目指す。3時間あまりで田沢湖へ。

田沢湖はまあ、たいした事はないわな。深度424m日本一も、透明度日本第2位も、潜ってみなければ分からない。この季節に湖水に入る気など毛頭ないし、やったら入水自殺と勘違いされるのがオチであろう。

よって田沢湖は外から眺め、パチパチと写真を撮って、ハイおしまい！ である。



☆ 品川ナンバーオバタリアン

さて、田沢湖を後にして八幡平に向かう。昨年のドライブでは醜悪十和田湖を後にして南下する形で八幡平に入ったが、今回は田沢湖を後に北上して入る。国道341号を八幡平に向けて北から南からとやって来て完走するという事に何かロマンを感じないか？感じないか……。

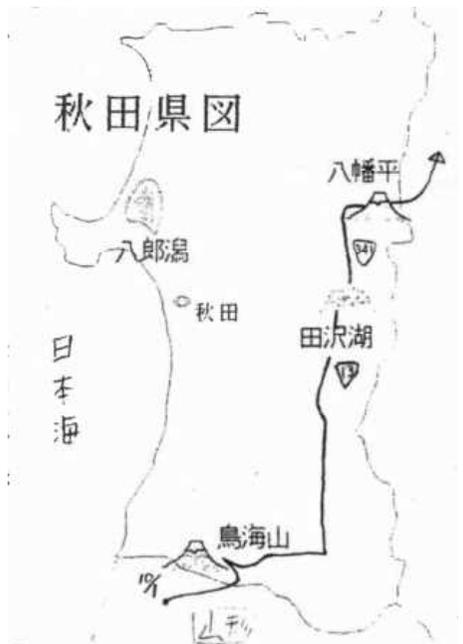
オバタリアンなどという新語が、最近流行っておるわけだが、私はあまり電車バスといった公共交通機関を利用しないし、人が集まるような所は極力出向かないようにしているので、今一つオバタリアンたる生物の臨床例に当たるといふ経験が無かった。ところが、ここ秋田県内国道341号線で東京のオバタリアンに遭遇してしまったのである。

まあ、S字カーブの連続する山間ルートをエス君あやつり快走していたと思ひねえ。と、前方にトンネル工事のための片側通行に規制するための信号があったわけだ。そのかなり前方でベンツ190Eが止まっている。品川ナンバーである。しかしベンツといっても5ナンバーのコベンツ（小さなベンツの事）であり、窓にもスモークなど張られていない。これはちょっとエエトコのざますオバちゃんまたはお嬢パターンであろうと、ピーンと来るものがあつた。はたして近づいてみると、中に乗っているのはオバちゃん2人連れであつた。この二人、地図でも見ているのか、下を向き合ったままである。そうしているうちにも赤だった信号が青に変わった。スタートして欲しいなあーなどと、こちらは思っているのにいっこうに走り出さない。クラクションを軽くファンファンと鳴らしても気付かない。おそらく車内はベンツにふさわしいエレガントな音楽で満ち満ちているのだろう。10秒あまり経って、ええかげん私がイラついて怒りのクラクションを鳴らすと、ドライバーオバちゃんはキッとバックミラー越しにこちらを2～3秒のあいだ睨みつけてからコベンツを発進させた。しかしその2～3秒の間に信号は赤になっていたのに……。

まだ続くのだ。再び信号が青になって、ようやく工事区間を通過する事が出来た。先ほども述べたように山間の見通しの悪い道路である。それでも道路自体は舗装されており走り易いので、アウトインアウトを繰り返しかっこう高速で突っ走っていたのだ。しかし幾つめかの右カーブを軽快に曲がりきったそこには、先ほどのコベンツが何の必然性もなく止まっていた。

私はサードのエンジンブレーキとフットブレーキで急制動した。後ろからやってきたバンは派手なブレーキ音をさせて最後はスリップしながらもエスクードの後方数mほどで止まった。

「なんなんだ、いったい！」私は車内で大声を出して



怒った。なぜ見通しの悪いカーブを曲がりきった所で、しかも車線のど真ん中で止まっているのだ！

コベツおぼんどもは、派手な手振りで何事か議論しているようだった。ひとこと文句をいってやるべきかとも考えたが、後ろに車も来ているので、やめた。というより言たって解らない人種であると言う事が直感的に分かってしまったからだ。

つまりオバタリアンとはこういった人種の事なのだ、とはるばるみちのく秋田の空の下で、私はひとつ賢くなった、とこういう事件なのであった。

☆ 八幡平

八幡平は、昨年 紅葉に大感動した大沼から見る。だが今年は時期的に紅葉は早すぎるため、散策する気にもなれない。凡庸な沼が横たわっているだけである。なんと昨年と比べてみずぼらしいことだ。まあ、人の主観と云うのは恐ろしいものである。

八幡平頂上は3度目。ようやく晴れた。ガマ沼も八幡沼も眼鏡沼も、良く見える。良かった良かった。3度目の正直だね。

で、またもや盛岡側に降りて、国道4号に合流。下北半島目指してひたすら北上。どんどこどここ走って走って、6時間。

途中、夕食を取った以外はほとんどノンストップ。国道4号は青森県に入ると、ほとんど高速道路のようなバイパスになるため、車を止めるきっかけが無いのである。下北半島の付け根、野辺地を通過したのが、夜の9時。そこからは国道279号線である。国道4号とはうって変わった田舎道で、街灯が無いので真っ暗闇である。道路は直線ながら、大きくアップダウンを繰り返すため、80km/hで走るには、けっこう勇気がいる。

本日のお宿、むつ市田名部の県道脇。走行距離521.3km

10 / 1 (日) ー下北半島から青森までー

☆ 時間制限. 尻屋岬

5時15分、起床。受験生向けの早朝ラジオを聞きながら、尻屋岬を目指す。尻屋岬は下北半島の東端で、斧のような形の半島の柄の先の部分に当たる。尻屋岬の手前は石灰岩の産地であり、港からすぐに船で運搬するのか、専用鉄道と大きな海中コンベアが目を引きく。

尻屋岬は、寒立馬という農耕馬の産地であり、実際に放牧されている。そのため岬に行くためには、放牧場の中の道を通らなければならないのだが、馬が出ないようにか、踏切



尻屋岬の昆布とり風景

をくぐるようになってきているのだ。で、この踏切が何と6時半にならないと開かないのだ。なんでかなあ、と思いつつも乾パンとお茶で朝食を取りつつ待っていると、開門の時間が迫ってきた。すると、ぞくぞくと軽トラが集まってきたのだ。オバちゃんばかりである。なにごとであるか、と思っているうちに開門である。

で、私は岬の燈台を目指して、海沿いの道を走って行くわけであるが、軽トラ群は途中で止まり始めた。帰りに見てみると、彼女らは海に入って昆布を取っていたのだ。10月初日とはいえ、津軽海峡の水はもう冷たいだろう。大変であるなあ。

☆ あかるい恐山

このあとは薬研溪谷に立ち寄り、そして恐山に登った。恐山は一昨年、旅行研究会のメンバーとともに、宿坊に泊まった事があるのだ。ここは宿泊施設としては、ハッキリ言って最低。まあ、飯がまずいとか御替わりができないとか、そんなことは宿坊だから文句は言うまい。しかし狭い部屋に何人も押し込んでおいて、しかも人を人とも（客を客とも、ではない）思わないような対応をしておいて、民宿より遥かに高い宿泊費を取るとは、今もって許しがたいものがある。

恐山菩提寺の裏手の山は、卒塔婆や風車や積み上げられた石が散在し、ところどころから硫黄が吹き出し「地獄を思わせる風景が広がって」いるわけだ。いわゆる賽ノ河原という奴である。一昨年来たときは、陽が落ちていたので、不気味で、正直な話「怖い！」という感じであったが、今回は青空の下である。白っぽい土壤に太陽光が乱反射して、とても明るいのである。PH(ペーハー)が3という異常な酸性度を持つ宇曾利山湖も、コバルト色が実に美しい。湖畔から、通ってきた小山を振り返ると、団体の観光客がぞろぞろと列をなし、またそこだけ陽が当たっていないもんだから、なにか亡者の群れのように見えておかしい。実際、彼らは観光亡者なのだ。わはは。



宇曾利山湖

☆ 釜臥山には登れなかったのだ

下北半島と北海道の間には、天下の公海・津軽海峡がある。そのせいか（国防上の理由で）、下北半島には自衛隊関係の施設が多い。半島の付け根には有名な三沢基地があるし、先ほど訪れた尻屋岬の東側、猿ヶ森砂丘は弾道実験施設になっている。陸奥湾は原子力潜水艦「むつ」の母港だったし、当然 今でも海上自衛隊の基地なのだ。さらにこの恐山の南麓には、釜臥山という展望の良い山があるのだが、ここも自衛隊のレーダー基地である。

この釜臥山に登ろうと思っていたのだが、この日から始まった日米共同演習の影響からか、立入禁止になっていた。看板には「作戦上の理由で……」と書いてあった。残念である。

下北半島は、まあ「みちのく」陸奥の さらに奥である。大過疎地帯であり、これといった産業もない。その結果が、自衛隊であり、核であり、さらには石油備蓄基地である。危険きわまりない物の吹き溜まりなのである。そして恐山があり、西海岸には仏ガ浦がある。なにか「破滅の起承転結・総パレード」という感じであるなあ。

☆ 脇野沢の港で一服

下北半島の西南端・脇野沢まで来た。これからフェリーで、陸奥湾をはさんで反対側の津軽半島へ渡るのだが、釜臥山に登れなかったため、時間が余ってしまった。フェリー乗り場の食堂で、この旅行で初めてまともな食事を取る。それでもさらに時間が余るので、港を散策した。様々なテトラポットがあった。三角形ではない物の方が多いなあ。

13時10分フェリー出航。1時間10分の船旅である。自分でハンドルを握るわけではないので、気が楽である。



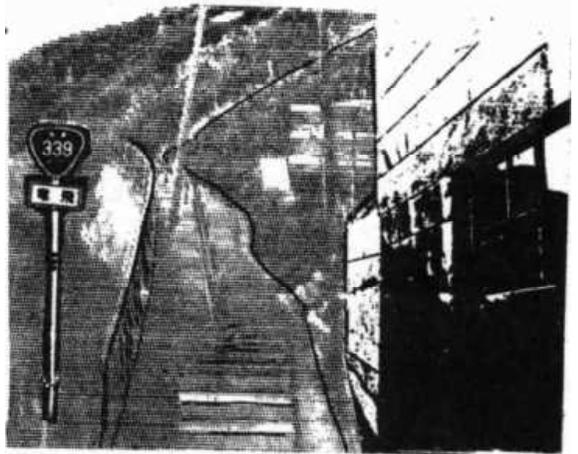
☆ ごらんあれが竜飛岬

津軽半島の蟹田にフェリーで渡り、そこからは海沿いに竜飛岬を目指した。途中ガソリンを入れるためスタンドに立ち寄ったのだが、誰もいない。「ご用の方は隣のナントカ商店まで」と看板がある。勝手にガソリン入れて逃げたろか、などと言う不埒な発想も頭を

かすめたが、まあそこは良識人ですから、そのナントカ商店に入った。しかし呼び声を上げて誰も出てこない。いよいよ不埒な発想が首をもたげてくるが、そこは理性で抑えた。店内を見回す。棚に放置されているクリームパンは4日前の日付が入っている。どひえ〜、こんなもん喰えるんか？あれこれ店内を物色していると、歩くのもしんどそうな干物婆さんが出てきた。そして、何も言わないのに、ガソリンを入れてくれた。婆さんは、ガソリン代を電卓ですばやく計算し、消費税もしっかり加算して、私の目の前に電卓の数字を見せつけた。津軽の人は無口と言うが、正にその通りである。

竜飛岬は2度目である。太幸はんの「津軽」や「津軽海峡冬景色」で有名な岬であるが、岬自身はとりたてて見る物もない。あるとすれば、国道339号だ。小泊と今別からやってきた339号は岬の手前で合流し、そこから岬めがけて降りて行くわけだが、あまりの急崖のため、歩行者用の小道しかできなかったのだ。右の写真で分かるだろうか、最後は階段になっているのだ。

あとは、崖の上に展望台があったり、温泉施設があったりする程度。海峡トンネルができてしまった以上、ここにはもう、物好きな観光客か、とにかく北を目指す感傷派の方しか来ないだろう。



竜飛岬の階段国道

青森県図



☆ 青森泊まり

今年も青森で宿を取るようになった。今年電話ボックスで速やかに宿を確保した。昨年の商人宿・第一旅館素泊まり3200円に対して、『青森グリーンホテル』シングル税サービス料込み5459円 プラス駐車料金700円 缶ビール280円、合計6439円！ 時刻表にも載っている堂々たるビジネスホテルである。う〜んリッチであるなあ。後悔半分ですが。

この日の走行距離は、下北半島の端っこからスタートして、津軽半島に渡り、竜飛岬をぐるっと廻ったにも関わらず、わずか324.2km。

10 / 2 (月) ー青森から山形までー

☆ 八甲田3度目の正直

実は八甲田山のロープウェー乗り場に来たのは今回で3回目である。1回目は台風接近のためロープウェーが動いておらず、2回目(昨年)は早朝であったため、これまたロープウェーが動いていなかったのだ。しかし今回は、青森のホテルで始発の時間を確認してやって来たので、ついに3度目にして初めて八甲田山に登ることが出来る。ロープウェーの行き先は八甲田山の田茂菴岳(たもやちだけ)標高1324mである。

頂上からは、北に下北・津軽の両半島とそれに囲まれた陸奥湾、その遥か向こうに北海道渡島半島が見え、西には津軽平野に岩木山がそびえ立ち、東南には八甲田山の主峰、赤倉岳・大岳がまばゆい雲を伴って屹立し、手前の湿原には池塘と紅葉した落葉樹が点在するという、実にダイナミックな展望が開けているのだ。

ロープウェー山頂駅からは、窪んだ湿地帯に行く。湿地帯を通り越して進むと赤倉岳への登山道となるのだが、登山をする時間も装備もないので、1周1時間の散策道をまわる。この散策道は湿地帯であるため、丸太で組んだ橋桁に板を渡した造りになっている。「下駄ばきでも十分な美しく整備された散策道」のはずであるが(看板によると)、実際は板の所々が朽ちており、しかも基礎部分も朽ちているのか、シーソーのようになっている部分も少なくないので、けっこうスリルがある。しかし、アップダウンが激しいため湿原の眺めは最高で、こういう湿原散策にありがちな「何も見えない」ということがない。

一湿原とは、標高の高い盆地のような所に出来るので、往々にして、その中を通る道からは、湿原自身が眺められないことが多いのだ。



八甲田山の池塘

☆ 岩木山神社？

八甲田をあとに、西へどんどん降りて行く。弘前を通りすぎると、今度は登りだ。このあたりは実に林檎園が多い。そろそろ収穫への追い込みの季節であろうか、袋をかぶせてあったり外してあったり、またまんべんなく色を着けようという意図か、銀板を地面に敷いてあったりもした。

岩木山に登る道路の途中で、岩木山神社というバカでかい神社があった。丹色の大きな鳥居が幾つも重ね、その向こうに本殿、その背景に岩木山という、できすぎた神社だ。六角形をした夢殿のような便所があった。それがどうしたってんだい！ しかし岩木山神社とはどこかで聞いたような名だなあ。

☆ 岩木山

岩木山は昨年につき2度目である。昨年は強風のためのロープウェー休止により、登れなかった。今回こそはと意気込んで、高い岩木山有料道路を通り、再びやってきた。岩木山有料道路は69のカーブを重ねて岩木山8合目まで登るわけだが、本当に69あるかどうか、数えながら登った。しかし40くらいまで数えたあたりで、道路のカーブ部分に小さな銘標があり、それがカーブナンバーであることに気付いたので、数えるのがバカバカしくなり、やめた。ちなみに帰りに見てみると、麓の方のナンバー1から5あたりはカーブとは言えないような緩やかなものであり、なぜわざわざこんなものまでカーブに含めるのか、と思った。設計者が何か69という数字にこだわる必要があったのであろうか。う～ん。

まあそんな事はどうでもよろしい。で、2度目の岩木山8合目であるが、なんと今回は、ペンキ塗り換えのためロープウェー休止ときた。ふざけやがって！何でわざわざ大阪から岩木山くんだりまで2回もやって来て、2回とも登れないんだ！しばらく怒り、なかなか収まらないので、レストハウスでカレーを食ったら、気が静まった。俺は子供か。

「八甲田山の例もあるし、また次の機会にしませう」と、いったんは大人しく諦めた。が、よくよく考えると、何もロープウェーを使う必要はないのではないか、徒歩で登ればいいのではないか、というアイデアが浮かんだ。「そうだ、山登りをしよう。」無謀な積極思考をともに、ザックの中にウーロン茶とチョコレートとインスタントカイロを詰め込み、ウィンドブレーカーを着込み出発した。

☆ 恐怖の崖登り

登り始めて5分で、ウィンドブレーカーは暑くて脱ぎ捨てた。腕捲くりをして、急坂を20分ほどで9合目に到着、そこから先は瓦礫道の登り坂である。

両手の前に瓦礫がある、4つ足でへばり着くように登って行く、そんな感じの急勾配である。汗を拭こうとふと立ち止まると、カメラバックの重さでフラァ〜と倒れて行きそうになる。降りてくる人はみな、登山靴にヤッケという山男スタイルである。対して私は運動靴に普段着、さらに重い重いカメラバックというスタイル。「山の恐さを知らない軽装登山者の代表のような奴であるなあ。」などと思われていたかも知れない。ここに至るまで、私はこんな本格的な山だとは思っていなかったのだ。昨年の東北旅行記を読まれた方は知っておられると思うが、この岩木山の山頂には

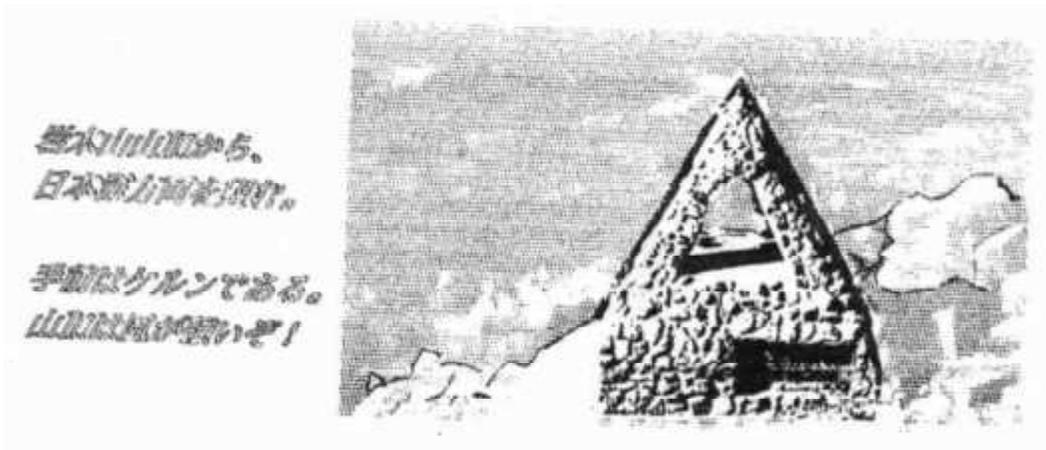


『岩木山神社があり華麗な社殿を並べている』と私は思っていたのだ。つまりこの山は山頂に建物が建てられる程度の山、大した事はあるまい、などと思っていたのである。しかし現実はこの急勾配、しかもすぐ横にアリ地獄のように、すり鉢状の噴火口が口を開けているような恐怖の登山道である。せめてハイキングシューズを持ってきていれば、と、今ごろ旅行開始早々に気付いた忘れ物を後悔する。

しかし、おかしい。ここまで来てやっと気がついた。岩木山神社とは、ここに来る前に立ち寄った、やたら大きいだけの神社だったのだ、と。じゃあ、上にあるはずのものは何なんだ？

坂にへばり着きながら休憩をとる。ヒュウヒュウと喉笛が鳴る。ここ数年、喉笛が鳴るような運動をした事が無いことにあらためて気付く。登り登り休み、登り登り休み、登り登りを繰り返す。そして、ふと頭を上げると、そこには蒼い虚空の拡がりがあった。山頂だった。最後はダッシュで駆け登りたかったが、足が思うように上がらないので歩いた。そして、誰も居ないことを確認して、「バカやろ〜」「まいったか！岩木山め」などと、いくぶん嗔れた声で叫んだ。さすがに「やっほ〜」などと軽やかに言える状況ではなかった。山頂のケルンの横に倒れかかるように腰を下ろし、ザックからウーロン茶を取り出し、飲んだ。喉に沁みたぜ！

さて山頂には、小さなプレハブの山小屋と、それよりなお小さな祠があった。この祠こそが『華麗な社殿を並べている』岩木山神社の奥宮だったのだ。いやあ、参った詣った！



☆ なげたらアカン

道路脇には様々な看板がある。地酒や銘菓のPR関係、宗教関係、マナー啓発などが代表例である。

宗教関係には「神の国は近づいた」とか「死後さばきにあう」など、なんか運転していてドキッとさせられるものが多い。

ドライバーに訴えるマナー関係のものには、「この坂を下れば今別町、急いで下ればあの世行き」というユーモラス？なスピード防止看板や、「ドカンと一発かまどけし」という意味不明のものもある。調べたところ「かまど」とは『所帯、一家』という意味があるので、ドカンと事故を起こしたら『一家崩壊・生活破綻』とかいう意味であろう。

また秋田県内では「秋田美人多し、わき見注意」という、どちらかと言うとわき見をあおるようにも感じられる看板もあった（四国にも同様の看板があった）。

看板の内容は、各市町村が何かテーマを1つに絞って、ドライバーに訴えるというパターンが多い。ここ岩木山の南麓・西目屋村では、空き缶のポイ捨てが問題らしく（おそらく林道工事のトラック対象だろう）、「捨てないで！」などという、男なら一度は言わせてみたいような男冥利に尽きる科白のものがあった。おそらくただ単に「空き缶を捨てないで」と言う意味ではあろうが。さらに「なげたらアカン」という某政府広報を戴いたものもあった。どうしてもよい事だが、あの政府広報は、野球の鈴木や柔道の山下など『なげる』のが商売の人間に出演させるとは（しかもその前後に引退している）、ギャグだったのだろうか。

☆ 恐怖の弘西林道

さて、西目屋村の集落を過ぎ、目屋ダムによる美山湖を過ぎると、舗装路が途切れダートが始まった。弘西林道である。弘西の「弘」は「弘前」を意味するというのは何となく分かるが、「西」とは何であるかと思っていたら、青森県の「西海岸」という意味らしい。昭和49年に完成したこの林道、青森県と秋田県との県境あたりの人跡未踏の大原生林地

帯を、地形に従順にクリアしている。それゆえ、ヘアピン・アップダウンの連続となり、地図を見ると小腸のようにクネクネと捻れくびれている。岩木山から西海岸まで直線距離にして30kmほどであるが、実走行距離は100kmを越えるのだ。

で、まだ陽のあるうちに走り始めたのだが、森林の中の林道ゆえ、既に路面は暗い。それでも小さな峠を登りつめると斜陽をもろに受ける。



時間の経過とともに空がだんだんと暗くなり、路面とのコントラストが無くなってくると、徐々に徐々に余裕がなくなってくる。ガソリンがほとんど無くなってきた。燃料計がEに近いところを指している。私は普段からガソリンは、ほとんど無くなってから給油をするという習慣が身に付いているので（そのほうがいくぶん燃費も良くなるし、再々ガソリンを入れるのが面倒だという事もある）、あとどの程度走れるかという目算は立てられるのだが、なにせ、いま現在 林道のどのあたりを走っているのかよく分からない。目標になるような物が何も無いのである。当然ガソリンスタンドなどがあるわけ無い。これはかなりプレッシャーになってきた。楽しいはずの林道ドライブが、だんだんと林道の終了を待ちわびるという感じになってきたのである。しかし非情にも さっぱり町にでる気配が見えない。少し下りになってきて「おう、ようやく山を降り始めたか」と歓喜していたら、それは単に谷や川を渡るために高度を落としていたに過ぎなかったりする。簡素な橋で川を渡り、再び登り坂になったときの絶望感、お分かりいただけるだろうか。それはちょうどマラソンか何かで、長い長い登り坂が終わりに近づき、ほっとしたのも束の間、短い平坦路の先に再び登坂が待ちかまえているのを知ったときの感情に似ている（長いなあ）。とにかく精神状態がきわめて悪化してきていたのだ。

さらに陽は完全に西の彼方に沈んでしまった。道路の上にだけ開いている空、その色がもうすっかり暮れなずんでしまっている。こんな所でガス欠になったり、事故を起こした

り、エンジントラブルを起こしたりしたらどうしよう、などと 普段思いもしないような悪い想像をしてしまう。車を捨てて歩くか、しかし町まで何十kmもあるだろうし、夜間、山の中を歩くのも怖い。さらに熊などの野生動物が出てきたらどうする？しかし、かといって車の中に居たって救助は期待できないし（この林道区間では対向車についぞ出会わなかったのだ！）、食料も余りないし……。とにかく安全運転で林道区間を通り過ぎるしかないのだ、と何かサバイバル的な雰囲気にもなってきたりする。

ラジオでも聞いて気を紛らわそうとするも、深い山の中では、ろくに電波が入ってこない。それならばテープを、とカーステにセットするも、なぜか音が出ない。これに至って完全に私は怒りだしたのである。なんなんだ！あとで調べると、そのテープは片面しか録音していなかったものだったのだが、そんな事もパニックになると理解できないものである。

あたりはもう真っ暗である。当然だが街灯など無い。光を発するものは自車のヘッドライトのみである。たまに道路にウサギやキツネが出てきてドキッとする。街は遠い。

けっきょく岩木山を出てから、3時間余りもの時間と100kmという距離を、弘西林道制覇に費やし、苛立ちと恐怖を体験した事になる。

岩をくりぬいたトンネルを過ぎると、舗装路だ！ついに林道が終わったのだ。このときほど舗装路の有難みを感じたことはない。「なんて優しいんだ」

今まで小刻みな振動が当たり前になっていたが、舗装路に入った途端、スーと宙に浮いているような、エアカーというものが有れば まさしくこんな感じではなかろうかという、乗り心地となった。そしてしばらく走ると、闇の中に光のかたまりが現れ、国道101号に合流。ここで ようやくジャングルから奇跡の生還！という感じがした。人工の光が懐かしかった。

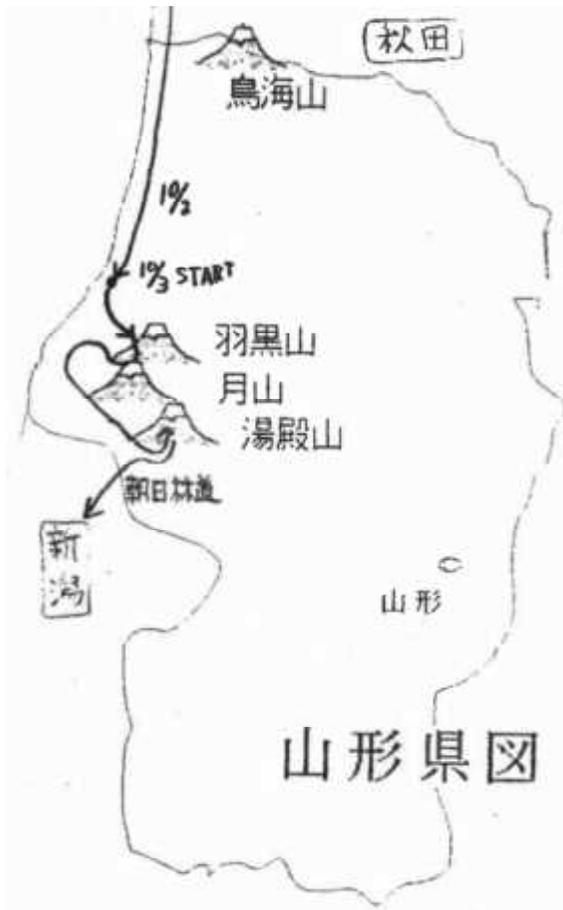
その後、国道脇の雑貨屋で肉マン3個を購入、夕食とし、しばらく走って懸念していたガソリンの補給が出来た。

☆ 秋田放送

能代から国道7合に合流。さすがに平地に出るとラジオが聞こえる。ABS秋田放送のDJは、訛りまるだしで好感がもてた。リスナーが電話をかけてくるのだが、その年齢層が、20代後半から30代の男性ばかりというのには驚いた。それも皆、若々しい喋り方をする独身者ばかりなのだ。DJのパーソナリティーにも よろうが、秋田という農村地帯という地域性も無視できまいと思った。

またリクエストで様々な曲が流れたが、とくに「麦畑」という田舎臭いコミックソングには笑わせてもらった。「おらといっしょに暮らすの～は～、およね、おめえだ～と～……」ちなみに最近、この曲は都会でもヒットしておるらしい。

また秋田のローカルニュースだが、2・3日前に、現在走っている国道7号沿いに青い



しかも有料道路で山頂まで手軽に行けるようになっている。「このままお手軽に山頂まで行ってしまっは、団体の観光亡者と変わるところがない。そんなのはいやだ。よって私はひとつ、麓からの参詣道を行こう。」などと考えてしまったのだった。参詣道入り口に着いたのが、朝の7時。日本一と豪語する石段に行く。あたりは一面、老杉が生い茂っている。花粉症の方には身震いするばかりのシチュエーションである。参詣道には小さな祠が幾つも点在し、そのひとつひとつが一個の神社を名乗っている。そんな小神社を従えて、実に風格いっぱい存在しているのが、五重塔だ。キンピカやまっ赤っかでは興ざめだが、そうではない。雨ざらしで塗装も剥げ、苔の色がうっすらと染み込んでいるのか 緑がかった白木色である。その五重塔が、仰ぎ見るような老杉の中で毅然と座っている。こういうのは実にいい。

その後、一の坂、二の坂、三の坂と坂道が続

き、途中で芭蕉の句碑なんかを眺めつつ、山頂に着く。簡単に書いてしまったが、けっこう大変な坂道であった。山頂は団体バスが発着できるような大駐車場があり、観光写真屋がおり、まっ赤っかな本殿や三神合祭殿があり、ジュースの自動販売機まであった。すぐさま参詣道を引き返した。

☆ 月山

月山は標高が2000m近くあり、夏スキーができるらしい。冬は、雪が深すぎてスキーが出来ないというから、どちらがいいものやら。その月山の八合目(弥陀ヶ原)まで、道路が付いているので登る。弥陀ヶ原は湿原地帯である。ここは日本海に向かって展望が開けている湿原で、箱庭的な高山湿原が多い中で、珍しい形態と言えよう。一周約一時間、大小様々な池塘とダケカンバなどの紅葉を見て廻った。さすがに高山である、雲が近い。気流で雲が微分的に変形していくのが手にとるようだ。

☆ 最低湯殿山

羽黒山・月山と続けて訪ねたので、これはもう湯殿山だけ仲間外れにするわけにはいか

なくなってしまった。

湯殿山有料道路（400円）に入る。そうたいして険しい山道でもないのに金を取るからには、この先どんな景勝地が待ち構えているのかと期待したのだが、なんと、あっという間に駐車場に着いてしまった。しかもそこから先はバスに乗れという。このまま帰るのもシヤクなので羽後交通（だったかな）バスに乗り込んだ。乗車賃100円である。で、団体客で満員のバスは、これまた、あっという間に着いてしまった。

バス停からは5分程度の歩きである。途中から「ご神域につき写真撮影禁止」などというバカげた看板が目につく。なぜご神域では写真を取ってはいけないのだ？美術館などでは、ストロボの熱が展示品に悪影響を与えるというもっともらしい理由もあるが、こんな山の中がなぜいけないのだ。神域だから？ならばそれはいったい何年前から決められた事なのだ？湯殿山開山の折から「書写を禁ず」などという掟が決められていたのなら、従おう。しかしそうではあるまい。おそらくは了見の狭い連中が「神を冒瀆する」とか何とか言って、ごく最近に禁止したことは明らかである。100歩譲って、それはそれで解らないこともないとしても、それでは、はたして神というものは、そういったものであろうか。私は無神論という立場で言わせてもらおうと、神というものの存在価値があるとすれば、それは「依りどころ」ではなかろうかと思う。間違っても「禁止」や「制限」をすることではないと思うのだが。

ということで貴重な時間と有料道路にバス代を重ねてやってきた湯殿山であったが、全くの期待はずれであった。そもそもここは、温泉が沸き出る花崗岩がご神体ということなので、神社としての建設物が一切無いのだ。あえて施設と呼ぶならば、観光客用の靴脱ぎ場がある。ここで裸足になってミソギを受けよというのだ。タダではない。御布施として300円を収めたうえで、ときた。ここにいたって私は完全に怒りの暴徒と化した。「見るものは何一つとして無い、短い区間にバカ高い金を取る。しかも、その上写真を取るなど！じゃーいったいここに何の価値があるのだ！え！言ってみろ！ふざけやがって！」と私は、暴利を貪る湯殿山神社とそれと結託して甘い汁を享受する羽後交通に対して、この場を借りて抗議し、猛省を要求する！ だいたい有料道路の入口に「ご神域では撮影禁止」と大書きするのが、観光客に対する観光地としての礼儀であろう！マイナーな観光地のくせして、こういう金銭面だけは一流なんだからナ、全く。ぷんぷんぷん！え？最初から行くなって？まあそれはその通り。

☆ 朝日スーパー林道

この旅もいよいよ大詰め。最後は林道で締めくくります。場所は山形県と新潟県の県境、スーパー朝日林道であります。

林道を難易度で5段階ぐらいに分けるとしたら、この朝日林道は、難易度2程度の比較的優しい林道であろう。堅くフラットな路面、ガードレールが完備され、標識もたまにあ

る。これなら一般の自家用車でも通れる。難易度が3になるとどうなるか。路面は堅いが、凹凸があったり方々に落石があったり。平均時速30kmをキープできるかできないかといったレベルでありましょう。今回の旅では、弘西林道がこれに当たります。レベル4になると、泥道でちょっとスピードを出すともう操縦不能になったり、あるいは強度の凸凹があって、口を開けてられないとかになります。最初に通った奥山林道がこれですね。レベル5？それはもう道ではないもの、であります。廃道とかですね。今回も実は恐山の釜臥山付近でミスコースをし、最後は川の源流のような所に突き当たって、涙の背走を強いられました（道でないような所を、バックで何kmも走ってご覧なさい、涙が出まっせ！）。

朝日林道は上述のように快適な林道であった。幻の怪魚タキタロウの棲むという大鳥池への道が分かれる程度で、ミスコースもなく無事完走。少し物足りないもので、もうひとつ三面林道というレベル3の林道を通り、そして新潟へ向かったのであります。

☆ 再び夜の北陸道

東北旅行もいよいよ終わり。普通の旅行なら夜汽車に乗って目覚めればハイ大阪、なわけだが、ドライブ旅行の場合、そうはイカのナンとかである。

「来た分だけきっちり走ってもらいますわ」と距離というものが待ち構えているのだ。

ま、そういう事も考えて、南北に点在する観光地を、行きと帰りに分散して立ち寄り、徐々に北上・南下するよう計画を立てていたわけだが、それでも新潟から大阪までは高速道路を降りるわけにもいかないのです、魔の北陸自動車道600km強行軍となるのだ。

東北地方図



さて、今回は新潟の手前で腹ごしらえをしたあと、黒崎ICに入ったのが、夜の8時すぎ。翌朝までの高速バトル開始である。栄PAで13分、名立谷浜SAで13分、有磯海SAで1時間、小矢部川SAで17分、南条SAで1時間7分と、昨年同様に小刻みなSAの継投策で乗り切った。それでも各SAまでの時間は1時間ほどかかるわけなので、けっこう疲れるのだ。たかが1時間ぐらいで、と思われるかも知れないが、ガラ空きの夜の高速を走るといのは、精神力がいるものなのだ。風景の見えない夜間で、しかも他車がないという事は、速度の比較が出来ないという事である。これは感覚を鈍らせる。100km/hで走っているつもりでも、自然と速度が落ちてくる。これは車によって最適の速度があると思うが、エスクードの場合はそれは70~80km/hなのだ。それ以上になるとエンジン音や風切音が大きくなったりして不快となる。よって体が自然と速度を落とそうとするようだ。

また右足も疲れる。左足はクラッチを踏む必要がないので、眠っているのだが、右足は常にアクセルを一定の深度まで踏み込んでいる必要がある。これがけっこう疲れるのだ。

ということで、夜間の高速走行は、疲れと眠気と速度の低下との戦いなのである。そのためには様々な策を弄す必要がある。こまめにSAで休憩を取るといのはもちろんであるが、そのSAまでの1時間をどのように対処するか。簡単なのは食物を取ること。あまり腹に溜まるものは、眼の皮を弛ませることになりかねないので、コーヒーなどの飲料や、ガムやすめるめなど量は少なくて顎の骨を使うようなものが良い。こうした食物作戦の次はカラオケ作戦である。つボイノリオ氏のテープを持ってきていたので、車内で大声を張り上げた。これは実に効果的であった。しかし難点はたいへん疲れるということだ。ということで次に考えられたのはラジオ作戦である。普通、ラジオというものは黙って聞くものであろうが、この作戦は相づちを打ったり大声で笑い飛ばしたりして、何かしらの反応をオーバーに行うというものである。車内で大声で独り言を言うなどは、もう完全に異常な世界であるが、こうでもしないとやってられないというのも事実なのだ。いちど独りで夜間走行してみたらい。解っていただけれると思う。

さて、こう言ったシチュエーションでの運転姿勢とは、どういったものがベストであるか。北陸道2往復の実績から編み出された姿勢をそっと教授しましょう。普通は、まあ、「一般道路よりいくぶん楽に、そしてはるか前方に視線を置く」といった程度でありましょう。しかしこれ、やってみると、けっこう疲れて来るんだな。まず腕がだるくなる。次に左足が退屈でじっと伸ばしていらなくなる。さらに右足はアクセルを一定に踏み込んでいるのが、だるくなって来る。ほっておくと速度が落ち始めたり、足が吊ったりする

(これは怖い!)。さらに背中も、同じ場所にもたれ続ける といのは あまり気持ち良くない。頭も刺激を求めている。というわがままな各器官の要求をまとめあげて、編みだした運転姿勢とは、
(次のページへ)

- 1 まず、使わない左足をあぐらの要領で座席に上げる。これがポイント！
- 2 すると体全体が右にシフトして、背中が背もたれの右端に当たり、あんまの要領で気持ちいい。
- 3 頭も窓ガラスに近づき、今までに無い新鮮な視界が開ける。また窓から漏れ入る風が、耳に触り心地よい。
- 4 さらに体重が右足にかかることにより、アクセルを踏み続けるのが楽になる。

名付けて、弥勒菩薩ドライブ。ただし混雑している名神などではくれぐれもやらないように。とっさにブレーキやハンドル操作が出来ないかね。

1 0 / 4 (水) —北陸道から自宅—

☆ 帰宅・旅立ちのとき

様々な作戦やみろく姿勢のおかげで、魔の北陸道を切り抜け、午前6時2分、無事自宅に到着。昨日からの走行距離934.2km、この旅行の総走行距離は2970kmでありました。

エス君を車庫に入れるや否や、駆け上がるようにして家へ入った。そして「ただいま！」の一声とともに便所へ駆け込んだ。実は前日来の宿便が、旅立ちの時を迎えていたのだ。

(お わ り)

読み終わられた方へ…… どうもご苦労さまでした。本日はもう、お家へ帰ってぐっすりとお休みください。私もようやく寝れます……。

印刷日の早朝、自宅にて